

第十二章 用水運動を支える

1 会社設立

愛知用水運動は第一回目の農林省開拓局に対する陳情だけの予定であったが、緋田の計らいによって、はからずも巢鴨戦犯収容所から出所翌日の岸信介元商工大臣に会い、その弟の佐藤栄作内閣官房長官の力添えで、その翌日、吉田茂総理に直接陳情できたことによって絶大な成果を生んだ、用水建設史上、これほど劇的な事件はなかった。

愛知用水計画はきわめて順調に進み、発起二年目にして、農林省の直轄予算がつくといつた早さで進んで行った。ところが、それに対しての地元期成会の負担金の集まり具合は必ずしも順調ではなかった。陳情団の上京にあたっては、特定の農業協同組合に信用借りしたが、当然、久野庄太郎さんの個人負担も重なってくる。

久野さんは、この運動に入る前から自分の個人の負担は覚悟の上と決めているので、個人預金が底をついてくると、土地を担保に金の借り入れを始めた。

これを見ていた緋田は、昭和二十四年春早々、会社を設立してその儲けによって運動をすすめる提案をした。

緋田は久野さんに話した。

「社会的によいことをするものが、商売をやって金儲けして悪いことはけっしてない。いまのように田を一枚ずつ売って運動を進めるのにも限界がある。このまま進めば一年二年経過するうちに久野家の財産を全部使い果たしても足りない。私は郷里岡山にも北海道にも全国的に友人、知己が沢山いる。いま、日本経済は物不足の時代である。甲地に不足するものを乙地から運べば高く売れる。北海道の小豆、澱粉を名古屋に持ち運べば高値にさばける。また、戦災で都会は焼け野原で住宅建設が必至。岡山の豊表を運べば高く売れる。会社を起こして、儲けて、その金で愛知用水運動をする。これはりっぱなことだ。この際、会社を設立して社会奉仕をすることはりっぱな事業である」

久野さんは戦時中、自作地三町歩余、名古屋の惟信町の服部家の十二町歩が労力不足で耕作をする者がなく、頼まれて耕作をした。肥料・労力不足を補うため当時推奨された有畜農業を実践し、豚一〇〇頭、労役牛・乳牛数一〇頭を飼育して、名実ともに県下一の農業経営の実践者であった。

戦後は服部家の小作地は返還し、自作地三町歩の裏作に早出しのじゃが薯、早生玉葱を作り、一万貫はとると働き手の久野さんの親父さんは頑張っていたが、その親父さんも昭和十八年に亡くなり、いまはもっぱら家族労働と実習生の力に頼っていた。愛知用水運動が始まった昭和二十三年の春からは、妻のはなと長男彦一の労働が主体となっていたが、昭和二十四年、愛知農林物産株式会社の設立以来、長男の彦一は会社の用務に専念することになり、働き手は妻のはなにその責任がずっしりかかっていた。

話は前後するが、知多八幡の久野家の戦死した四男伝之助のために建てた家に緋田工が一家全員で住み、愛知用水のために協力するようになった。昭和二十四年の春、緋田も生活の

すべてを久野家に頼ることに心苦しきもあって、会社設立を久野さんに提案したのである。

久野さん自身もいまのような売り食いでは、いつかは力が尽きると考えていたので、緋田のすすめにしたがつて、昭和二十四年四月十日、久野さんの近親者、協力者に、久野家の全資産を担保に三百万円の出資を依頼して、愛知農林物産株式会社を設立して活動に入った。その出資者の明細資料は現在手元にないので、同社破産時の債権者名簿から推定した。

会社は名のように農林物産の取扱いによって利益を得る目的で、主として北海道の澱粉、小豆類や岡山産の畳表を名古屋周辺の会社に売りさばくという商売のやり方で、素人ばかりであったが、それ相当の利益があった。その実務は若い久野彦一が主としてあたり、北海道への汽車での往復に連結器の上に乗って行ったという話も聞いた。

社長・久野庄太郎、専務取締役・久野彦一、常務取締役・緋田工で始めた。教職にあった浜島は加わることをさし控えた。

2 愛知農林物産の用水運動への協力

当初、愛知用水運動の資金は運動員各人の拠出であり、昭和二十三年十月一日、愛知用水期成会ができたものの、会費の拠出は思うにまかせず、運動費の立て替えは二、三の協力的な農業協同組合などに頼ったが、それも限界があり、久野さんの個人的な資金提供が大きかった。

別途掲載の愛知用水期成会の経費一覧表（第十章）に見られる通りである。

・昭和二十四年 農林省開拓局現地調査。

- ・ 木曾川下流取水用水組合の反対対策費。
- ・ 山崎延吉、石黒忠篤先生の現地視察。
- ・ 昭和二十五年 高松宮殿下現地ご視察。
- ・ 昭和二十七年 愛知用水土地改良区の成立。
- ・ 昭和二十七年十月 伊藤佐衆議院議員選挙運動資金。
- ・ 昭和二十八年四月 同右。

これらの主要事項に対して、愛知用水期成会よりの正規の経費外の諸経費は、愛知農林物産の支援を受け、その額は相当なものであった。

さらに、愛知用水計画に外資導入の見通しが立って、その必要量と頻度が激しくなり、つもりつもって、それが表面化したのが昭和二十九年七月の初め頃であった。

3 会社の倒産

愛知農林物産株式会社の手形が不渡りになることを察知したある債権者の取立人が、農林物産の気のよい運転手をだまし、「ちよつと会社の倉庫の鍵を貸してくれ」と言つて、スペアキーを作つて昭和二十九年七月十六日の夜、愛知農林物産の倉庫の中の商品（小豆、澱粉、畳表など）をトラックぐるみ全部持ち出してしまった。そして、その翌日に手形が不渡りとなり、会社は黒字のまま倒産してしまつた。

手形の裏書きをしていた久野庄太郎、久野彦一の両名は破産宣告をうけた。ただちに破産管財人の管理下に入り、次のように処置された。

1. 愛知農林物産株式会社の一切の業務停止と財産の凍結保存。
2. 久野庄太郎、久野彦一に係る財産権利、関係する資産の凍結・保全を破産管財人
内正夫の管理下に置く。
3. 久野庄太郎、久野彦一の両名の扶養家族を次のように処分をした。
4. 久野庄太郎、妻久野はな、母よしの生活一切を次弟久野金之助が見る。
5. 次男久野哲男は名古屋市材惣商店の住み込み店員となる。
6. 戦死した末弟の子久野勝雄は半田農業高等学校中退、久野金之助の養鶏所の住み込
み作業員となる。

7. 長男久野彦一は農林省木曾川調査事務所の臨時運転手となる。

8. 次女久野清枝は京都農地事務局名古屋建設部の臨時職員となる。

(久野彦一と妻、幸枝は名古屋市中で生活していた)

その時点での債務の内訳は、

一、愛知農林物産株式会社の出資	四〇〇万円
一、久野庄太郎分債務	二四一二万八三二五円
一、久野彦一分債務	五六六万二八五〇円
計	三三七九万一一七五円

家、家財道具は赤紙が貼られ、わずかに生活道具類のみは赤紙を貼られたまま使用を許されたが競売に付された、家屋敷は次弟、三弟の努力によって買い戻してくれたので、所払いというような悲惨なこともなく、同情的な取り扱いを受けた。

そういう一家離散の中、ふつうの人なら意気消沈して参ってしまうところだが、久野庄太郎さんはますます意気軒昂^{けんおう}。愛知用水着工のため愛知用水公団設立、外資導入の直前が一番大切な時だから、わが家の破産、離散も覚悟の上と、関係市町村を廻り、愛知用水完成後の用水利用の計画作成の利水委員会設立を説いて歩いた。

世界銀行の調査団来日に当たっては、農村同志会の同志の協力によって、兼山取入口や幹線水路の主な位置に取入口からの距離、水路の流量、その地点の工作物の大きさなどを書いた標柱を建てて廻り、まことに常人ではできないことをやっていた。

二十九年の年末には、献餅運動を例年通り実施した。農村同志会の各位も赤紙封鎖の中、久野さん夫婦、よし婆さんをいたわりつつ、餅つきを実施した。この年（昭和二十九年）の年末、野間町上野間の鶴海士郎さんが献餅運動で東京出張中、一家五人（義父、妻子五名）の痛ましい焼死事件があり、久野庄太郎はじめ同志会員は心から泣いた。

愛知農林物産株式会社設立発起人の常務取締役緋田工は破産の累が身に及ぶことをおそれ、久野社長から、「緋田工は愛知農林物産株式会社とは一切関係ない」という一札をとって、名古屋の丸万証券株式会社の顧問となり、八幡の家は引き払い、守山市（当時）の小幡に移転してしまった。

庄太郎さんの母親よしさんは、なかなか辛抱強い人であったが、緋田の引き揚げの折に何かあったのであろう。緋田は頼まれて来たのであり、会社、久野一家の破産と離散については責任はないものの、生活の世話は相当かけていたから、一言くらいのお礼の言葉があるだろうと思っていたところ、何の言葉もないので、ちよつといぶかる言葉が出たら、「会社が潰れたのは、わたしのせいではない。みんな久野一家のせいだ」と言う、そのほか、かなり



久野さんの母・よしさんを慰める会を浜島家で開いた。左より久野夫人はな(45歳)、庄太郎(54歳)、同母よし(74歳)、浜島辰雄(38歳)、浅田やす(としえの母、52歳)、浜島としえ(32歳)

強烈な言葉が返ってきた、と涙をこぼしておられた。

このようすを、私の家内に話したら、「久野さんのお母さんも、はなさんも大変でしょう。一度実家の母を私の家に呼んで一緒に慰めの会をいたしましょう」と、茅屋に久野さんのお母さんと久野御夫妻をお呼びしたことがあったが、本当に喜んでいただいた。

その後、昭和五十年頃、加藤周太郎から緋田が亡くなったと聞き、久野さんと守山の自宅での葬儀に参列させてもらった。しかし、緋田が用水運動の当初、愛知用水に尽くした功績は絶大なものであった。

債権者一覧表（久野庄太郎に対する）

伊藤宗平、加藤周太郎、(株)中央相互銀行、久野平一、久野金之助、久野隆治、下村豊一、平松輝治、伊藤政朝、安永秋夫、浅井村吉、久野源蔵、安永義雄、平松重治、加藤鉦吉、久野建三、浅井村治、

加古文雄、加古正好、早川正義、加古文夫、加古康一、加古富雄、共栄商中株式会社、東海
 交易株式会社、金利損害保証その他

二、四一二万八、三二五円 久野庄太郎分負債額
 五六六万二八、五〇円 久野彦一分負債額

合計 二、九七九万一、一七五円

これらは、会社は別として久野庄太郎に対する強力な協力者であったことを忘れてはなら

ない。

4 失意から再起へ

同志から「手を引け」と勧告！

昭和三十年二月十日のことだ。当日は朝から地元大府、豊明の利水委員会から境川下流域の五カ村川排水改良事業を県営事業として取り上げてもらうよう要望が出ていて、農林省京都農地事務局、名古屋農地建設部遠藤虎松部長の現地調査があり、県当局者、地元担当者、町村担当者と現地を調査していた。私（浜島）も地元のことであり、久野さんと一緒に現地立ち会いをしていた。

当日正午頃、半田の愛知用水建設期成会の田村金平事務局長から久野さんに四時頃までに常滑農協に来てもらうよう連絡があった。

何のことかよくわからなかったので、私も同行することにした。午後四時頃、常滑農協の会議室に愛知用水期成会副会長の滝田次郎（常滑町長）、中川益平（武豊町長）、田村金平事務局長は先着して待っていた。

そこで、中川益平副会長から、「久野さんのこのたびの破産宣告については期成同盟会森会長ともども重大な責任を感じている。お陰で愛知用水も着工の見込みが立つところまで来ました。久野さんにこれ以上の負担をかけては申しわけない。森会長とも相談の上であるが、今日から愛知用水運動から手を引いてもらいたい」と言われた。

さすがの久野さんも顔面蒼白、一点をにらんで沈黙考。しかし、「ハイ、わかりました。

いろいろお世話になりました」という言葉が出るまでに五分とはかからなかった。

言った人も、立ち会っている人も気持ちと同じ。

久野庄太郎の破産の影響が用水運動に及んでは困る。用水運動で久野さんにこれ以上の苦勞をかけては申しわけない。今まで同盟会が負担しなければならぬ金を久野さんが立て替えた額はどれほどかわからない。かと言って破産にかかわり合うわけにはいかぬ。しかし、久野さんが同盟会の金を使い込んでいないことは先行き、どんなことが人の口に評となつて伝えられないとも保証の限りではない。

ここで久野さんの心中を推測することはあまりにも痛々しい。そもそも愛知用水運動を言い出したのは、久野庄太郎本人である。その人に「これからは手を出すな」と断るとは何事ぞ。久野さんはその時のことをこう書いている。

「愛知用水建設は目の前だが、これからの努力が大切だ。世界銀行の融資。愛知用水公団の設立もこれからだ。ダム位置の決定。水没者の世話、水を使った新しい農業の推進をどうするか。なぜ三人だけでこんな重大な問題を言い出したのか。いや、三人は私のことを一番心配してくれている三人だ。ここで三人の言うことを聞かずに破産の身が何ができる」

「ハイ、お世話になりました」と言う前に久野さんの頭の中を今までのことが駆けめぐった。

ハイと言ったが、ここで引きさがる意志は毛頭ない。ここが正念場だ。白紙に還つて出直す時だ。



加藤周太郎

「ハイ、しばらくよく考えさせていただきます。よくわかりました。ありがとうございました。これで、ご無礼いたします」

と言って赤紙の貼られた寺本のわが家へと急いだ。

私は久野さんの身が心配で、しばらく久野さんについて廻ることにした（そのことは田村、中川の二人にそっと耳うちした）。どこで、どんな風に考えが変わらぬとも知れなかった。道みち話すことはほとんどなく、寺本の久野家に着いた。

久野家では、しばらく用水運動もお休みだというくらいで大した話は出なかった。そして、「明日は私の用水運動を一番支援してくれていた人の家を廻るから一緒にしてくれますか」と言われ、

「もちろんです」

とお答えして、明日は名古屋の愛知用水土地改良区の事務所であうことにして車で大府の自宅まで送ってもらい、お別れした。

翌日、お昼過ぎ、久野さんは名古屋の土地改良区の事務所に来て、「これから名古屋木材の加藤周太郎さんのところに行くが、一緒にしてくれますか」と言われ、「もちろんです」と、さっそく私は、自分の仕事を片付けて、田村金平総務部長に事情を話し、加藤周太郎家にお供した。桜山を越した山崎川の近くの石川橋のほとりであった。先に電話がしてあったのか、ご夫妻でお待ちになっていた。

そこで久野さんは、今までの経緯いきさつをお話ししたら、加藤さんは、

「それは神様の思おもし召めしです。しばらく休めということ。同志に反抗して、事を荒立ててはいけません。もう、あなたがいなくても愛知用水は出来るところまでできているという

ことです。神様が一服しなさいということです。破産ということは、あなたの経済行為を一切禁じられていて、あなたの財産一切破産管財人が処理します。そして、裁判の結果が下るまで、あなたの経済行為は禁じられます。神様はよくやった、ここで一服しなさいということです」

と諄々とさとされた。久野さんは、

「よくわかりました。そのようにいたします」

と頭を深々と下げた。加藤さんは、

「あなたは破産するまで愛知用水に尽くされた。立派なことです。けっして、もうこれ以上、あなたに迷惑をかけては申しわけないと言って下さる人を恨んではいけません。黙って皆様の言われるようにしたがいいます」

とことばを続けられた。

加藤家を辞して、金山橋の三弟久野平一の所に向かった。平一は、

「兄者、それは飽かれたということだと思う。兄者がやれば十万円ですむところ、二十万円かかってもよいということだ」

「寺本のおふくろや、はなさんのことは俺が面倒を見る。大阪の兄の所にも相談したがよい」

このあと今後の生活上のことである話をし、自動車は帰し、大阪に向かった。

次弟金之助は大阪で十萬羽養鶏を営んで大成功していた。

次弟は、

「兄者、それは飽かれたということだ。もう兄者がいなくても愛知用水は出来るといふこ

とだ。この際、黙って身を引いたがよい。破産のことは、弟とよく相談して始末する。おふくろのことは弟と相談する。また、何とか、すまい居宅のことは、金山の弟と相談して買い戻す。おふくろに悲しい思いはさせない。兄者は心配せずに体に気をつけて、静かに愛知用水の行く先をながめているがよい」

「彦一のことはあれだけの男だ、行く先は自分で考えるであろう。幸枝は貧乏暮らしは馴れているから心配しなくてもよい」と慰めてくれた。

久野さんは、

「俺はまだ人間ができていなかった。永平寺にでも行って、しばらく修行をする」。

そのあと、いろいろ今後の生活の道を立てる相談となった。その晩は、大阪の金之助家に泊めてもらった。私は二人の兄弟愛の心底にふれて、涙が止らなかった。

翌日の新聞を見ると、北陸は大雪で北陸線は不通。まして永平寺の山には入れない。これは困った。永平寺が駄目なら、かつて、親しい仲であった山科の一燈園の西田天香さんの所に行こうと山科に向かった。幸いにも天香さんが在園で、よく話を聞いて下さった。

「それでは、しばらく当園で考えて見て下さい」

と快く引き受けて下さった。私も安心して天香さんによくお願いして、名古屋事務所に帰って、忙しい土地改良区の末端五町歩の耕地整備の仕事に集中した。

久野さんに見れば一大ショックだ。子どもの時代から培ってきた志を一点に搾って用水運動に集中してきた。愛知用水公団が設立され、愛知用水はできるであろう。しかし、これからが一番大切だ。水を使って新しい農業が始まる。水を使って利益を生み負担金を完納

して、農家の経営が安定するまでにはまだまだ遠い道程だ。「俺を追放してうまく行くだろうか」。心は千々に碎けておさまらない。

一 燈園での懺悔の生活

愛知農林物産株式会社が破産したショックで、久野さんはいったいどうなるのかと周囲の人々は心配した。債権者からの追及を逃れることはたやすいが、多くの人々に迷惑をかけた愛知用水計画はここまで進められた。それをつぐなうこともできず、その最後の責任をとることもできないという心労で彼は精神的に参っていた。そして、とび込んだのが京都の一燈園であった。以下は久野さん自身が語る一燈園での生活である。

まず、ダム建設にともなう水没者の世話は大丈夫だろうか？ 本当に用水地域の用地買収はうまく行くだろうか。農家の営農指導、つまり、水を使って儲けた金で、負担金が出せることが一番大切であるが、これを誰がやるか。

農業だけでは採算が取れないから、上野町、横須賀町、八幡町の地先に埋め立て地を作つて、工業用水を使ってもらつて農家の負担を軽減せねばならぬ。仕事はこれからだ。工業用水二八、〇〇〇万立方メートルでは絶対不足する。今後、これを格段に増加利用することは誰がやるか。飲料用水を限なく利用するにはどうすればよいか。頭の中が一杯であった。

そして、用水のことが自分の人生のすべてであり、命であった時にストップをかけられて、気が狂いそうだ。破産は覚悟の前であったが、現実に破産してみると、経済行為の一切を断ち切られる。破産は簡単に解けるものではない。一切の資産は投げ出しても、これから長い

裁判の末、破産解除になることである。

思っても見なかった重圧が身にかかってきた。後から聞いたことであるが、天香さんまでが、「久野さんは破産の始末を一燈園にまで持ち込むのではないかと心配された」ということを聞き悲しくなった。破産が、自分で頭の中で考えていたことよりもはるかに重圧がかかってくるものであることが、じりじりと自分を苦しめることに驚いた。

そして、ここは何もかも、なりゆきにまかせて、一燈園の懺悔の生活に入るのが肝心だと、一切世間の生活を断ち切って修行の道に励んだ。(時に五十七歳)

そして誰が来ても逢わなかった。誰にすすめられても山を降りようとしなかった。

一燈園の人は、私を知らなかったが、私も知り合いはなかった。ましてや、まだできていない愛知用水のことなど知る人はなかった。私は一燈園とはかつて親交もあったが、天香さんもまことに気軽に安直に借金に追われてここへ逃げこんだのではないかと心配されたが、そうでないことがわかり、安心された。さすが江州人であるので、経済にさといと感心した。私も何もかも忘れて一燈園の生活に専念してみた。

起床

一燈園では、起床時間は五時半、合図は板を三つ打つだけ、山々にこだまして未明の大気を震わす。釣鐘とちがって、「カッソ」と短く鳴ります。「カッソ」と鳴った時目を覚まします。二つ目で坐ります。「カッソ」三つ目で立ち上がります。三つでよい。たとえ後で「十」打っても駄目です。

三つ鳴って起き上がれなかったら、もう駄目。その朝の礼拝には出られません。朝の礼拝

に出られなかったら、同人でも客人でも一燈園にいる価値はありません。朝の会が一燈園の最上の行ぎょうです。一つ鳴るを聞いただけで、一遍に立ち上がれますが、それは考案がない。老人にはあぶない。三拍子で立ち上がると名調子です。私は必ず三拍子で立ち上がった。

一燈園では、男女皆さんが、黒い半天とモンペです。私は三日目には洋服をやめて、黒装束を求めて着た。同人と同じだから天香さんが私を見失われたことがあった。私は朝の礼拝にお経を唱えることを知らぬから、黙って座っていたが、まぼろしが去来するから、お勤めの経本を買って読んだ。

一燈園の行は主としてお掃除であった。だから一燈園は隅々まで綺麗であった。特に便所が美しい。一燈園は六万行願と称して修行のために、市内一般家庭へ便所の掃除に行くから、他人の不浄がよくわかる。特にお寺さん等に行くと一燈園とは雲泥の差である。私は農業であるので、便所掃除はあまり辛くはありません。毎月行われる二泊三日の知徳研修会の場合には、立派なお方が修行にこられるが、この人々は大変苦痛に感じられる様子であった。

懺悔

どんなお勤めをしても、また、便所掃除をしても、私の頭のもやもやは去らない。この一週間が一カ年くらいに思われた。

一燈園では、毎朝のお勤めの中に天香さん作の道歌を朗詠されます。

その一首に

なべて世のさわりの根をば尋ねゆけば

おのが罪とぞかへりきし業

というのがあります。毎朝、その歌を詠っていたのですが、今まで気がつかなかった。その朝は初めてその歌が気にかかった。

何回もくり返し暗誦していると、自分のことのように思われた。室に下って、いつものように一時座って、また考えた。考えた結果、残念ながら次第に「俺が悪かったかしら」と思うよりほかなくなってきた。

俺の用水と違って、思ったことを言った。俺は組織の中に生きられる人間ではないようだ。皆様にすまぬことをしたかなと思ったら体に震えがきた。ちょうどその時、お山（天香さんのお室）から私に電話があった。

私は瞬間、電気にでも打たれたように「あれっ！」と思った。

かつてない恐怖を感じてお伺いした。いつお会いしても笑い顔の天香さんです。「どうですか」と優しく言われたので、天香さんは、私の心の中を御存じだ、天香さんは生きた仏様だと思った。私は心の中を見抜かれたと、恥入って頭を下げた。「わかりました」と言った。まことに終世難忘の一瞬であった。

天香さんも喜んで、「あの通り詰まっています。では一つ片付けて下さい。あなたは、不浄物の取り扱いが上手だと横沢さんから聞いております」

ああ俺は忘れていた。そのころ一燈園の農業主任で横沢松次郎さんという、元陸軍大佐がおられた。園内の便所も受けもっておられた。私が百姓だと聞いて、毎夜私の室に話しに来られて、農談をした。たまたま便所の詰まった話が出た。その解決を私がお引き受けしたので、それを天香さんに話されたらしい。「わかりました」と言ったのは、便所が一杯であることがわかったのだと解せられたものらしい。私は入園以来、初めて心から笑った。天香さ

んは汚い作業を私が快く引き受けてくれたと思って笑われた。

私は心中雲散霧消。こんなことを悟りというのかと思った。

作業。いかなる知者でも金持ちでも、糞ほど始末に困ったものはない。肥料になるから片付くが、その価値のないものとわかった今日、全く困ったものだ、さすがの天香さんも、これにはよほど困られたらしい。

そこで、私は自家浄化の設備をおすすめしたが、にわかにはできない。問題の不浄はすでに満杯である。私はまた考えた。もう座禅する必要はない。ただ懺悔するのみである。懺悔の前に不浄も清浄もない。座禅より不浄片付けの方が得意である。「わかりました」と申し上げたので、天香さんも大変安心されたらしい。さっそく横沢さんと相談した上、満たん解決にかかった。

一燈園には、現在の名神高速道・京都インターチェンジの地に農業設備があったので、そこを利用して、不浄物の片付けにかかった。人々は戸口を締めて鼻を被って通ったが、私は十年の間忘れていた懐かしい作業であった。

それ以来、私は一燈園の生活が楽しくなり、居心地がよくなった。天香さんとの話は、私の考えと行き違いがあったが、そこでは悟ったような気がした。

そうだ、私が悪かった。思い違いだ。もう、いつまでもこうしてはおれない。「話の行き違いとはこんなものか」そうだったか！

俺がやらずに誰がやる

その頃、愛知用水は、土地改良区も関係農民の同意を得て昭和二十七年五月八日に設立さ



奥京都の一燈園まで久野庄太郎さんを迎えに行った農村同志会の仲間たちと

れ、国営事業として採択され、外資導入も幾多の曲折を経て可能となり、経済効果を考えて、単なる国営事業で、これだけの事業量だと十数年から二十年もかからなければできないので、公団を設立して一挙に解決せねばならないと、この秋には公団設立の準備にかかっていた。

そこで私は、

- 1 土地改良区は公団ができたから高給の人を雇うな、大きな机や部屋を持つな。
- 2 公団は土地改良区に金を貸すな。後から返さなければならぬ。
- 3 記録映画は公団で作るな。必要なのは、愛知用水以外の人だ。政府で作ってもらえ。
- 4 農林省の管理官は土地改良区に金を貸すな。
- 5 農民は自分達の用水を作るのだから用地買収に文句を言うな。国のきめた価格に不等性はないはず。
- 6 公団は御役所ではないから、威張るな。

と言っただけで廻っていた。しかも俺が始めた仕事で、毎日無給で破産するまでやっているのに、「やめよ」と

いうことは何だ。全身の血が逆流し始めた。こんな大切なことになぜ三人しか来ないのか。いや、「やめよ」ということは言いにくいことだ。ここに来て言ってお下さる人は親切な人だ。この人達の言うことを聞かないのは人でない、と悟って、「ハイ、わかりました」でひき下がった。

そして、すねたように一燈園に逃げ込んだ。ああ!! 俺が間違っていた。臨海工業だ、営農改善だ、俺がやらずに誰がやると。

さらば一燈園

一カ月ちよつとの一燈園の生活に別れを告げて、昭和三十年三月十五日、すつきり皮を脱いだような気持ちになり帰郷した。

晩雪も消えて、東山に鶯のなく三月も暮れ、小乗愛知用水観を解脱し、とたんに大乘観に目が覚めて、

イ 愛知用水の農民負担金の軽減

ロ 用水の多目的利用計画

は、俺がやらずに誰がやるという責任感と自信に目が覚めた。そして、約束通り妻が迎えに来た。目の覚めた気持ちになって、天香さんや、鶯や疏水に咲く桜にお別れして、再度、愛水館（自宅）に帰って、新しい気持ちになって、仕事する勇気が湧いてきた。

人間というものは、新しいものを得ると元気が出るものである。入学、卒業、就職、結婚などで心機一転するものだ。一燈園の一カ月の生活で、失意のどん底から自分の使命を発見して、かねてから考えていた臨海工業の誘致をする決心が湧き上がってきた。

このことによって、これから私の生きる道を発見して、一日の閑居も許さぬ心境になり、大急ぎで帰って、その翌日から臨海工業の可否、成否を知るために、かねて自分の尊敬する人々を訪ねて指導を受けた。

この人は、と思う人を訪ねた人から意外に反対され、説明が充分でなくて軽く扱われたりして失望したり、また大変ほめられたり、悲喜こもごもで、いま考えると、おかしいくらい真剣な狂奔であった。いまその代表的なもの二、三、記憶に残っているものを挙げる。

後に愛知用水公団の総務部長になられた、当時農地局の庶務課長をしておられた富谷彰介氏に話したら、言下に愛知用水のホームランだとほめられて、いい気になって、経済の稲葉秀三先生を訪ねた。その日はNHKの放送があつて、田村町の放送局を訪ねた。忙しいところ寸暇を惜しんで出てこられ、話したら、意外に強い大反対。「臨海工業で何を造るんだ。鉄だろう。鉄はいま余っている。鉄を造って、また戦争だろう。大反対だ」と言われてがっかりして、東京駅まで、ひよろひよろして帰ったが、かつて、石黒忠篤先生に「仕事をしようとする、目の出来事によって、大反対をされたり、ほめられたり、一喜一憂しておつては駄目だ」と言われたことを思い返し、吉野信次先生（現商工大臣、元愛知県知事）に話したら、「愛知用水と臨海工業か、いいじゃないか、面白いぞ。お前、ただの百姓じゃないな」とほめられて、商工大臣に予算をつけて援けてもらったり、元氣を出して知事の桑原さんに話したら、叱られたようなもので「臨海工業は天保新田の西角までだ」。ここで引き上げればよかったに、知多の浦浜までと言ったら、「君はなんでも自分のよいと思つたことを言うが、君の思うようにはいかん」。「管理組合できまつているんだ」と喧嘩になつてしまつた。私は朝早く知事さんの所へ行つたので、奥さんが「朝飯まだでしょう」二人で食べて

話して下さい」と、パンとハムエッグを食べて、やっと収まった。お互いに知らなかったが、天機はすでに動いていた。昭和三十年から日本経済は大規模工業化に向けて舞台は大きく廻りつつあった。のちほど詳述するが、富谷彰介さんの言ったように、愛知用水のホームランどころでなく、伊勢湾臨海工業が日本経済の起死回生の大会ホームランになったことをお互いに知らなかった。

〔躬行者〕より）

（註）知多町（石井町長）などと名古屋南部臨海工業地帯造成のための期成同盟会設立の準備をすすめていった。